

---

# 極道の花婿くん

佐東

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

極道の花婿くん

### 【Nコード】

N1937Z

### 【作者名】

佐東

### 【あらすじ】

すべての原因は、僕が平凡な人間で、庭師の息子だったことにあるのだ……「俺のことを好きと言え」って、何が悲しくて脅迫されて男に告白！？一般ピーポーによる、極道の偽りの花婿としての波瀾万丈な日々が始ま……らないでほしい切実に！そう、始まらないよう阻止したい物語。ラブよりコメディをとりたい。うすらB L。

## 脅迫された

とある理由で、僕が不幸な人生を歩むことになったのだと思うと、僕は僕をうんだ両親を恨まずにはいられない。

すべての原因は、僕が平凡な人間で、庭師の息子だったことにあるのだ。

「……今まで、隠してたけどな」

通い慣れた極道屋敷の庭で、いつも通り父さんの手伝いをしていた。最初は恐れ多く、脳細胞が死滅しそうなほど緊張したものだったが、たくさんの出入りする極道の方々は一般ピーポーである僕たちなんかこれっぽっちも眼中が無いと分かると少しは楽になった。近くに縁側があつて、奥の畳部屋でなにやら重大そうな会議が始まろうとしていても。腰を落とした強面のおじさんたちの間を厳格のあるじーさんがのっそりと歩いてこようとも。言葉の端々に血なまぐさい単語を織り交ぜ、緊迫した空気を演出していようとも。

……ああ、平和だ。

空を優雅に飛び回る鳥を見上げつつ、額の汗を拭う僕。いつの間にか、現実逃避が上手くなっていた。

「俺は……」

だから、じーさんの向かいに立った男が強く何かを主張していたことにも、その内容が少し特殊だったことにも、それから、こちらに向かつてきていることにも、気付かなかった。

僕は、残念ながら気付いていなかったのだ。

「真央っ」

「……あ、え、何、父さん？」

慌てて手元から視線をはがし、父さんの指さす方を見る。

着流し姿のすらりとした体格の男が、ちょうど僕に手を伸ばすところだった。腰をぐつと引き寄せられ、手にしていた剪定ばさみを取り落とす。

何も理解しない僕に、おじさんたちの驚愕の眼差しが突き刺さる。なんか、誰かと、密着してる。

……うん、どういうこと？

ぎぎぎと首を回して見上げたら、すつと通った顎筋が目に入った。一切こちらには目を向けず、決意のこもった眼差しでその先を見ている。

見たこともないような綺麗な顔に見とれ、僕はまた疑問を忘れていた。

「俺は、女になんて興味はねえ。俺が好きなのは、こいつだ！」

一瞬にして我を取り戻した。

呆然とする父さんはもちろんのこと、世界の終わりのように絶望にくれる強面のおじさんたち、何故か強気でどうだ分かったかと胸をはるこの謎の男を前に、まずは説明が欲しいと冷静なのが、この僕。

今し方愛の告白をされたような気がするのだけど、なにぶん今まで関わったことのない人だし、それによりによって怖い関係の人だし、それどころか男同士だし。

現実に向つ向から受け止めることはできず。

眉をひそめて見上げ続ける僕の視線も、いまだ受け止められていない。

「何を、言っておる。お前には早く妻を持ち、わしの跡を継いでもらわねばならんだぞ。そのような戯れ言を聞いている場合ではない」

「だから嫁はまだいらねーんだよ。んなほいほいと結婚できるか」

「これはこの小笠原組が出来てからの決まりなのじゃ。跡を継ぐためには、妻の支えが無ければならん。人の上に立つ上で大事なことなのじゃぞ」

「俺は俺一人の力で組を率いてみせる！ 古いしきたりなんぞ知ったこっちゃねーんだよ」

「リュウ！」

……なんか親子げんからしきものが始まったぞ。怖え。この人が力こめる度に僕の肩がミシミシいつてんだけど。痛え。それはそうと、話の内容からものすごく恐ろしげな全貌が見えてきた。

組がどうの、跡を継ぐだのなんだの、妻だのと……これ、結構デリケートな極道の話じゃね？

「だから、俺は、今こいつしか眼中にねーんだよ！」

その渦中に、なぜ、僕が……！

こいつしか眼中にねえって、こいつだけは眼中にねえの間違いじゃない！？

「女と結婚なんかしねえっていつてんだろ！俺はこの男以外認めん！絶対に認めん！」

この人、明らかに僕のことダシにしてる！

「あ、あのー！」

分かってしまったマヌケな真相に、僕は抗おうと勇気を振り絞って声を上げる。言い合っていた二人は最初ひたすら気付かなかったけど、何度か大きな声を出す内にやっと言葉が届いた。

「ぼ、僕、帰っていいですか……?」

「そうだ、おまえさんからもリユウに言ってやってくれ。分家の娘たちから早く嫁を召し上げると」

「しねえって言ってるんだろ頑固じじい。おい、おまえ、俺が好きなんだろっ!」

「そうじゃなくて……」

誰も聞いてねえしな。

僕、どっちの味方になるつもりもなければ、自分の平凡な人生を守りたいんですけど。

「ああ?」

「ああ!?」

「ひいいいっ」

しかし、お二人から鋭い眼光で睨まれ、亀のようにきゅっと首を引っ込める。

え、えええ、どうすればいいの!……?

助けを求めて、父さんの方を見れば、すでに忽然と姿を消していた。父さん、今僕は、あなたから生まれたことを激しく後悔しました。

「……いいから、おまえ、俺のことを好きと言え」

泣きそうになる僕の耳元に突如暖かい吐息がかかる。囁かれた言葉はこれまた恥ずかしいものだった。

なにこれ、ほんと、何プレイ？

この場はどうあれ、艶めいた仕草に我知らず顔が熱くなる。そうして俯くと、聞こえてるのかと顎を引き上げられ無理矢理顔をあわせられる。

ひーっ。

やめろ、その顔はあなたの武器ですか。綺麗と表現するに何の間違いもない端正な顔立ちに、男の僕でさえ息が詰まる。断じて言うが、僕にはソッチの趣味はねえ。

「言わないと、強引にでも証明してやるぞ」

顎を掴まれたまま、強引に顔が迫ってくる。

こんな脅迫つてあるか？ 今なら、殺してやると言われるよりもやたらリアルに恐怖を感じる。

僕はすぐに喉から声を振り絞った。

「僕も心からこの人を愛しています!」

妙にクサイセリフ出た。



いちゃつかさせられた

そこから、僕と不良の不思議な関係が始まった。

いや、始まってしまった、と言う方が正しい。だって僕は微塵も望んではないのだ、年齢〃彼女いない歴だろうと、高校生は青春を謳歌しろと校長先生が言っていたとしても、それこそこの状態をクラスメイトの女子に羨ましがられていようとも。

……だって、なあ？

相手は、極道の若頭で、男だ。

「お前も立派な人間になったものだなあ。小さなころは、セーラームーンとケッコンするとか宣言してたくせに」

そう言うことは蒸し返すなよ。

クラスメイト兼、幼き頃からの親友である慎太郎が茶化すでもなく半ば本気な面もちでそう言ってきた。

ちなみに僕は小さな頃から強くてかわいい女子が好きである。自分が弱虫ということはとうの昔に自覚しているため、守ってくれる彼女というのが理想だったわけだ。

「それがまさか、今や小笠原先輩の嫁候補だとは」

……理想とはうらはらに、僕にあてがわれたのは強くてカッコいい男子だなんて、それ、ただの虐げてくる彼氏じゃないか。

いろいろと間違っている。

僕は慎太郎の真面目な関心声に否定も反論もできずに、深いため息を付いた。

小笠原組というのは、この地域に昔から我が物顔で存在する極道一家だ。先祖が有名な政治家のお偉いさんだったということもあり、我が家が三十個は入りそうなかいかい屋敷を拠点とし、その一方的な権力と力を振りかざしてこの地域一帯のヤクザを制圧している。

そして、そんな恐れる小笠原組の長男であり、跡取り。その名も小笠原竜人……さん。

いきなりダシにされ嫁候補にされ、何が一番やっかいだって、同じ学校だってことだ。存在はずっと知っていたけど、まさかこんな風に関わることになるだなんて思いもなかった。せめて後一年でも遅ければ、小笠原さんも卒業してて、僕も何食わぬ顔して逃げられたに違いないのに……。

ぶるぶるっとポケットが振動して、僕は喉の奥、ヒイイと悲鳴を上げた。

「お、お呼び出しか？ 愛しい旦那サマの」

恐る恐る携帯を取り出してゆっくり画面を確認する僕を見て、慎太郎が今になってニヤニヤとからかう口調だ。

何が愛しい旦那サマだ……。

ふらりと立ち上がっていつも通り教室を出ていく僕の背中に、いつてらっしやいという慎太郎の呑気な声と女子のヒソヒソ声のしかなかった。

一ヶ月もずっとこれなんて、僕の寿命が心配だ。

「遅え。寄越せ。今すぐに」

急いで教室に駆け込んだというのに、開口一番、罵られた。

「うおい、メールが来てから一分と経ってませんがね……」というのは、到底口にしません。スンマセン、と即座に謝りつつ、用意していた漆塗りの弁当箱をサッと忍者のように差し出す。

軽く睨まれ、鼻を鳴らしつつ、ぶんどられる。

小笠原さんから来たメールの文面はそれこそ「いますぐおれのもとへこい」だった。面倒ごとが嫌いな性質らしく、絵文字も漢字でさえも一切使わないメールは憎らしくも男らしい。

面倒嫌いなら呼び出すとは思うけど、生まれた瞬間から人の上に立つ存在だったこの人にとって、命令も呼吸をするのと同じらしかった。

弁当箱の蓋を開けた小笠原さんが、ぎゅいつと眉間にしわを寄せる。

この瞬間、ほんつとやだ。極道の女たるもの、夫には誠意を尽くし、身を捧げ、愛情を注がなきゃいけないらしく、昼の弁当の準備までしているんだけど、これがまた。

ただのしがない男子高校生が料理とか。できるわけねえだろ。

「中身……コンビニ弁当じゃねえか」

げえ、やっぱバレた。

「いつになったら本気で作ってくる気だ？ ああ？」

「すいません、だって、僕のへたくそなおかずよりコンビニの方がよっぽどおいしく愛情に溢れてると思うんですが」

「てめえは、機械より無機質な愛しか持ち合わせてねえのか？ ああ？」

いやっ、そういう意味じゃなくっ。

ガンツと、机を蹴る音に床で正座をしている僕の首がぐひいつと竦む。音につられてか小笠原さんのクラスメイトの視線が集まるが、僕にはもう慣れっこのので今更羞恥心は無い。むしろ恐怖心。

冷や汗たらたらな僕は、すぐに信用を取り戻そうと首をスポンツと伸ばして渾身のネタを指さした。

「これっ、小笠原さん。これ、見てくださいよ。これこそが僕が作ったものなんです。きれいでしょこれ」

「これこれうるせえ」

「スンマセ」

ぐひい。

伸ばした僕の指は、小笠原さんの箸で横にぞんざいにどけられた。その箸が摘んだのは、光沢のある深紅のバラだ。

「飴をとかして作ったんです。熱い内に形を作るのが難しくて四苦八苦しみましたけど、これが一番良くできました」

こうしてコンビ二弁当だと怒鳴られることは想像の範疇だったのだ、言い訳のためにも準備しておいたものだ。飴細工は初めてだったけど、溶かして形作るだけだったから意外と僕にもすぐできた。というより、指先一つ一つで見た目の味が変わってしまうのがおもしろく、ハマって昨晚は夜通しやってしまった。

そんなこんな自信作ですよ、と期待をこめた目で見ても。

「弁当に飴入れるヤツがどこにいる」

「ええっ、ダメですか？」

「却下」

……らしい。

なんだなんだ。ひとに弁当作れと命令しておいて、せつかくの自信作を非常識だと突っぱねるなんて。それこそでかい器で、やればできる男だと誉めてもらわねば。僕、誉めて伸びるタイプだから。いや、何が伸びても困りそうだから良いけど。

「真央」

名前を呼ばれて顔を上げると、頬に冷たい感触がした。

あ、来た。来た来た、いつものヤツ来た！

ガキンと氷のように体をかたくすると、小笠原さんが確認するよ

うに視線だけで辺りを見回した。ええもう、分かるでしょ、そんなことしなくたってみんながこっちを見ていることくらい。

ふん、と鼻を鳴らした小笠原さんは僕の脇の下に手を入れ簡単に持ち上げると、隣の机の上に座らせた。

ヒイツ、という僕と後ろの席の真田さんの悲鳴がカブツた。あ、ずっといたんですよね、スイマセン。

「寄越せ」

開口一番の寄越せとは違うことは経験上分かっている。こうして机の上やら、あろうことか膝の上にまで乗せられたときには、寄越せの意味合いは変わってくる。

つまり、食べさせろってことだ。

……ねえええよ。

「おまえの一番、どれだって？」

いらんこと言わなければ良かった。これですね、ええ、と僕の震える箸さばきが深紅のバラをとらえる。いや、これをどうしろと？  
今やクラス中が僕と僕の箸の行方に注目している。これにはどれだけ経つても慣れない。慣れるほうがどうかしている。

「お、小笠原さん」

「呼び方。くち、開けてやんねーぞ」

だったら鼻にぶちこみますよ!?

……は、どうしても言えないので。うがぁーもうっ!

「りゅうとさん、はい、ぁーん!」

見るに耐えなかったので、目をつぶってからその口元に箸ごとぶんなげた。

全僕の細胞が、燃えた。

「おまえな……」

苛立ちを含んだような声と、がりごりと飴をかみ砕く音が耳に響く。知ったこっちゃねえぞ。

だいたい、なんでこんな風にバカっぽく正しくバカな正真正銘バカプルをしなきゃいけないんだい。

僕、男おとこ! いや、この場合男だからこそ目を付けられたんだけどさあ!

きゃあ、と密かに女の子の悲鳴が上がって、僕はウンザリ。

「マズイ」

近づいてまるでほっぺにちゅーするみたいに、囁かれた味の感想。声が聞こえていない周りから見ればそら仲むつまじいバカのおつく力

ツプルに見えていることだろうけれど、実体はなんてことはない、ただの虐げるものと虐げられるものの関係だ。

僕が一番って言ったそばから、けなしたよこれ！

「……いつまで続けるんですか」

間近にある小笠原さんの整った顔立ちを見ながら、僕も小さく問いかける。

本当に好きあってもいないのに、他人には仲の良いカップルだと思わせるウソの関係を、だ。

こうして顔をつきあわせているのだって、どうせ周りから見れば秘密の睦言を交わしているとも思われているんだろう。

「親父が諦めるまで、だ」

簡潔に返された答え。黒い瞳は、強い決意を宿していた。

どうしてそこまでしてして、女の人との結婚を拒むんだろう？

男といちゃつくくらいだったら、スパンツと清く正しく女性と結婚したほうがいっそ楽だと思っけどな。

と、怪訝な目で見ていたらしい、スパンツと頭をはたかれた。次を寄越せ、って、あーもう好きにしてくださいよ。鼻の穴にでも、耳の穴にでも、好きなだけ寄越しますとも。



## 屋敷に連れ帰られた

学校への行き帰りは、その後ろをひっそりと付き従うというのが、小笠原さんの嫁候補としての決まり事だった。

金持ちなら車というイメージがあるんだけど、極道は違うのかはたまた小笠原さんだけ違うのか、いつも歩きだ。三十分ほどの道程、小笠原さんは顔が知れているのか常にチラチラと見られていた。

うん、まあ、だからこそなんだけど、たまにこうして肩を組んだり手を繋いだりと、はたして理想の嫁像と合っているのかは別として、バカップルっぷりを披露させられている。

「チッ」

小笠原組の極道屋敷、そのでかい木の扉に辿り着いた瞬間、忌々しく舌打ちされ手を投げ捨てられた。

おおおい、あからさまだなあ。こっちだって繋ぎたくねーわ！  
汗でドロドロの手のひらを制服のズボンでこしこしと磨き上げる。

「来い」

って、いつもはここでお別れのはずが、今日は中まで入れられるらしい。ええ、やだなあ、父さんの付き添いで入るならともかく、この若頭と一緒に一緒だろ？　つまり、ギンギンに鋭く注目されてしまうってことで。

できることならパンピーのままでいたい僕。今日も平和な青空は、

前に見たときとは違ってため息を付きたくなるほど重かった。

連れてこられたはいいが、しばらく待つてると部屋に通された僕は、どうせ暇だしと縁側から庭へと出てきた。

父さんの手により剪定された緑の草木は、風通しまで計算されており虫さえ一つも付いていない。造園には欠かせない庭石や灯籠も、父さんのセンスにゆだねられ家主の満足のいく配置をされている。池から一定間隔でポンポンと無造作に置かれているように見えるが、それも計算尽くで後ろに見える景色との兼ね合いもあり風情を感じさせる。さすがだ。

この屋敷は、こうして父さんの手が増えられた庭がたくさんある。というより、実質建物よりこの庭の方が大きいと言っても過言ではないと思う。

僕もいつか、これくらいでかい家の庭を一人で立派に仕立てたい。汗水垂らして働く父さんの背中を見てずっと夢見てきたことだった。

そんな思いを馳せながら庭を見渡したとき。

いつからいたのか、ヤンキー座りをしていた三人のイカツイ男性陣と目が合った。ひいひい。近づいてくるなり僕の全身をなめるように見回し、最後に「コイツがなあ」「男だなあ」「信じたくなえなあ」とそれぞれもらしガツクリと消えていった。

……いろんな意味で、ほんとどという意味。

「こんにちは。お義姉さま、ご機嫌いかが？」

僕こそガツクリしていると、背中に今度は柔らかい女の子の声がかかった。おねえさま！？と驚いて振り返ると、そこには黒地に桜吹雪の入ったすげえ着物を着た美少女が立っている。

「はじめまして。挨拶がまだでしたわね。わたくし、小笠原魚姫といますの」

「うお、ひめ？」

「ふふ、変な名前でしょう。竜人お兄さまの妹ですわ」

「はあ、はじめまして。篠田真央ですが」

「知ってますわ」

ひらつと蝶が舞いそうなほど可憐な仕草と声で、美少女が笑う。

胡散臭いというか、わざとらしいというか、その口調も相まって不思議な感じがする。

それにしても、妹さんか。いるなんてしらなかったな。いつもこの屋敷に出入りしていたけど、女の人一人も見かけたこと無かったし。

「っていうか、おねえさまって」

「お兄さまと結婚されるのでしょうか？ 法律上まだ婚姻関係は結べませんが、この世界じゃ寢床を共にすれば夫婦として認められるのですわ」

ウソだろ。そんな簡単に夫婦になってたまるか。ふふふつという笑いがやっぱり胡散臭い。

魚姫さんはその腰にまで届く長い髪をふわっとなびかせ、僕の側

にまで歩み寄った。

「お兄さまのどこが好きですか？」

「好きっていうか、むしろそれは僕が聞きたいくらいだし」

「まあ。理由が見つからないほど盲目に慕っていらつしやると。それじゃあ、告白はどちらから？」

「え、ええと、好きと言えと強制的に口を割らされた感じで」

「まああ。お兄さまもお人が悪い。先に言わせて恋愛の主導権を握ったのですわ！」

あれええ？　僕、言い方間違ってるかな。変な方向に誤解されてるんですけど。

兄妹とはいえ、僕とお兄さまのウソのカップルを知らないらしい。魚姫さんが敵だか味方だか知らないけど、本当のコトを言ってはダメだろうか。

「お兄さまに真央さんのことを聞いても何も教えてくださらないの。まるで興味ないって言いたげに……酷いですわよねえ？」

「いえ、興味ないんですよ、本当に」

「あら？　悲しいことを言っただけ駄目ですわ。今までお兄さまが好きだと言う他人は一人もいなかったのですから……今となって、それは女性ではなく男性が好きだからだと判明しましたけれど。とにかく、自信をお持ちになって」

「は、はあ」

本当に労りの気持ちを込めて、肩ポンされた。自信持ちちゃうの

はダメだろう。僕こそおかしな方向に突き進んで行くぞ。

「あのー、魚姫さんは、嫌とかじゃないです？ お兄さまがまさか、男が好きだということは」

本当のことじゃないが、共犯でウソを付いているゆえ、僕にも罪悪感。目をそろーっと泳がせつつ、堂々とした出で立ちの魚姫さんを見るとプツと吹き出された。

「人の趣向なんて、知ったこっちゃないですわ。私は正當に男性が好きですから、他の人がどうであろうとどうでもいいんです」

「自分以外、どうでもいいと？」

「ええ。それが例え実の兄であっても」

「……サッパリしてるね」

「よく言われますわ」

ほんと羨ましいくらいサッパリしてんなおい。

「まあでも、お兄さまの気持ちも分からないではないですわ。組のしきたりに沿って女性と結婚した父も、形ばかりですぐに離婚しましたから。夫婦とは儚いものだとかしくしでも思えますもの」

「そうなんだ……それは辛いね」

「そう思ってくださいます？ 優しいのですね」

「だってそうじゃなきゃ、男を好きだとまで言って結婚を拒否したりしないでしょ。そんな風に考えがねじまがるなんて、そりゃーも

う、考えるだけで辛いし怖い」

魚姫さんは、目をぱちくりとさせると、あらまあ、とうわごこのように呟いた。思ってもみない反応に僕こそあらまあ？だ。

「母親をなくしてしまったことではなく、考えをねじまげてしまったお兄さまを辛いと思ってくださるのですね」

「あ、そうか、今の言い方だとそうなるね。ごめんなさい、そういう意味じゃ……」

「あら、別に責めてるわけじゃないんですわ。偽善じゃない、極道的な考え方ですわね。素敵ですわ」

ほっぺたに手を当てて、うつとりと呟く魚姫さん。

……に、うおおい、と青ざめる僕。見るからに一般ピーポーな僕に与える賛辞ではないよそれは。全くもって嬉しくねえ。

一步仰け反って風情立ちこめる庭の一部になりすまそうとする僕の肩を、もう一度ポンされる。

「応援してますわ」

ニツコリと、小笠原さんに脅されるのと同価値がありそうな笑みを向けられて、僕は庭の一部になりきれず、浮いた存在のままぎこちなく頷いた。

なんだったら、小笠原さん、この子がゴクツマにふさわしいと思う。

## ファミリーに見せつけられた

僕が現実には打ちひしがれ、一人置の上で涙し俯せていると、小笠原さんが戻ってきた。あの色気あふる着流し姿だ。僕の姿を見るなり、何してるんだと呆れヒヤクパーで聞いてくるので、何でもないんですよとなけなしのプライドをもってそう答えた。

「どつかズレてんだよおまえ。ネジか？　ネジねえのか？」

なんだ失礼な。そんなもんはいから身長が欲しいですと心の中で答えた。……別に、低いわけじゃないんだと思うけど、まだ中学生だという魚姫さんと同じくらいだったってのがなんかシャクというか……。

今でも見上げなければ顔が見えない小笠原さんが憎たらしいというか。この兄妹より身長が高ければ脅しにも笑みにもすぐには屈しなかったと思うのに。

「小笠原さん」

どこか違う部屋へと案内されながら、僕は声をかける。小笠原さんは、振り返るでもなく返事をするでもない。いつもながら他人の目がないときはトコトンそっけない。

構わず続ける。

「あの、交換条件をください。この家の人を諦めさせるまで、僕、あなたを好きなフリをします。だから、それが叶ったら、僕のお願しも聞いてくださいませんか」

「……ああ？」

「ひいつ、だ、だって、一方的にやれって言われたって理不尽じゃないですか！」

「これまで黙って従ってただろうが。何が不満だ、ああ？」

不満すぎる。今まで黙ってたのだって、だって、怖かったからだし。この状況に慣れてくると、よくよく不満が募ってきた。

「あのっ、僕にも庭の手入れさせてください」

意を決してお願い事をする。

あ、立ち止まった。肩越しに振り返って怪訝な目で見てくる。

「庭あ？　なんでそんなこと言いやがる」

「僕、昔からこのお庭が好きなんです。おおきいし、土台が良いし。少しくらい僕の手で綺麗にしたいなって」

「……却下だ」

「えー！　そんな無体なあ！　ちょっとだけですよ、ちょっと！」

「うるさい。却下」

「スイマセン」



結局睨み一つで黙らされた。理不尽だ、うう。

そうこうしているうちに辿り付いたのは、一面畳の縦長い部屋だった。何この部屋。よく時代劇とかで見る、お殿様がいらっしゃるような部屋だが、その一番前、由緒ありそうな掛け軸や高価そうなツボが置かれたその前に、ドンと二人掛けの黒いソファが居座っていた。

えーなんか合わない。畳にはやっぱりザブトンだね。

そんなことを思ってた、くいと肩を抱かれて部屋の中へと誘われる。

ギョツとした。

前しか見ていなかったけど、中央から後ろは全て人じゃん。それぞれヤンキースタイルのイカツイ男たちがあぐらをかいて座っていた。僕と小笠原さんの入場を物々しく見つめている。縁側には魚姫さんが座っていて、ヒラヒラと手を振っている。

「な、なんですか、これ」

小声で問うも、黙ってると言いたげに肩をギリリと潰された。いや痛え。

ソファの前に辿り着くと、小笠原さんはまず僕を座らせた。ボツフンと僕のお尻を包み込むソファの弾力の心地よさと言ったら。しかし感動している場合ではない、次に襲い来るのは、僕の膝に乗る小笠原さんの頭でした。

僕は、ソファではない……！

と、言えればどんなに気が楽だったか。実際に口から出たのは「

ギヤツ」とかいう鳥が首を絞められたみたいなか細い悲鳴だった。  
いや、これはどんな酷い絵面になっているのか、想像するだに恐ろしい。お膝抱っことか、お手で繋ぎとか、それはまだ許容できるとして……いやできないが！ 膝枕はちょっと、かなり、洒落にならないだろう！

「おおおおおがさわら」

「もっと可愛い声は出せないのか？」

「いやいやいやそういうプレイをしている場合でなくて」

「だったらどうすればおまえはその気になってくれるんだ。人が見ているからって恥ずかしがる必要はねえだろ。いつも通り甘えてこいよ」

「あ、あまえてなんか……」

「ああ？」

誰か止めてよヘルプミー！ ダメだこの人、人に見られているときの演技力といたらパネエ！ それほどまでに結婚を拒否したいか！

ぞわぞわと鳥肌を立てる僕をさらに追い込むかのように、小笠原さんはまず僕を下から妖しく見上げ、へびみたいに這いながらソファの背もたれに手を置いて囲ってくる。近い。本気でちゅーする五秒前。本気で茫然自失する一秒前。

「これ、何やつとるか」

オッサンたちの、固唾を呑む音やら悲鳴やら騒ぎが大きくなると

同時、ひととき威厳のある声が部屋に響く。

「なんだ、遅かったなジジイ。いいところで邪魔しやがって」

やっと離れた……。しかし、今度は姿勢正しく座る僕の肩を枕にしてソファに寄りかかったため距離感は一ほどとあまり変わらない。だらしなく片足をソファに上げた格好でのっそりと歩いてくる小笠原組組頭をひょうひょうと茶化す。

「何が邪魔じゃ。わしは認めておらんからの。本気でもわしらを欺く冗談だとしても、おぬしらの関係は許し難し」

「何を言ったって俺は決めているからな！ 結婚はしねえ。だが、てめえの跡は俺が引き継ぐ。早くくたばりやがれてんだ」

「フンッ、簡単に譲ってたまるものか」

「くそジジイが！」

ギャー僕のすぐ側でケンカしないで。力任せに僕の膝握りつぶしてるし、小笠原さん、痛い痛い！

ジジイ……もとい、小笠原さんのお父さんは、ソファに来るなり僕らを力任せにひっぺがしてそのソファを陣取った。畳に転がされた僕はいち早く体勢を整え、さらにお父さんに噛みつきこうとする小笠原さんの腕を引っ張って止めた。

「い、今ケンカしたって無意味です。ここは穏便に済ませて、ここぞつてときに逆らいますよう、ね？ 力の使いどころを見極めてく

ださい」

小笠原さんは、舌打ちをして僕の腕を振り払った。それ以上は黙ってくれたので、どうやら僕の言うことを聞いてくれたらしい。

後ろにいる男たちと同じように二人して座り直す。

組長も、満足したのかふんと鼻息をつくと、口を開いた。どうやら、このために集められた本題が始まるようだ。

遭遇、そして威嚇された

話の内容は、至極簡単で。

翌日から始まる組同士の抗争の、いわば激励会だったらしく。今となつては思い出すだに恐ろしい戦々恐々とした生々しい極道用語が飛び交い、その度に男共は奮起し沸き上がり、僕は縮上がった。空が暗くなり、月が昇るまで続いたその集会は、宴会という第二ステージへと進む。

……激励会つつーより、前夜祭じゃねえだろうか。

僕の率直な感想は、もちろん、今日の前で広がる酔いどれオヤジたちの盛り上がりを見てのことだ。

帰るタイミングをすっかり逃した僕は家族に連絡すらままならず、こうして手に透明な液体入りのコップを持たされている。

「よおい、あんちゃん。どうだい、若は良い味すんのかい」

オヤジの一人に絡まれた。

「さあ……僕、まだ食ったことないんで」

「つかー！ もったいねえな、若のあの美貌だぞ！？ おまえもタマってんなら遠慮せずガンガン行け！」

「僕タマなんて持ってないですもん。武器になりそうなのは、剪定

バサミくらいで。だからもちろん抗争なんか参加しませんし」

「んだおまえ男じゃなかったのかよ!? 若も物好きだなあ。正統派女子より変わり種を選ぶとは」

「変わり種って言ったら、僕、スイートピーとコスモスのあいの子スイーモスが好きです。ふわふわしてかわいい子なんですよ」

「そのくせもう子どもの名前まで決めてんのか。変わってらあ」

極道の組員とも恐れることなく普通に喋れるのは、この環境に慣れたせい、疲れているせいに違いない。断じて、この水で酔っているわけではない。

「どんちゃん騒ぎの中しばらくうだうだと喋っていると、後ろから声がかかった。」

「真央さん、お兄さまを知りませんか？」

「お、いよう、魚ちゃん」

「はい、三郎さん、真央さんに絡むのはそのくらいにしてくださいませね」

僕の肩を組んでいたオヤジの手を、魚姫さんは軽くはたき落とし、てくれた。なんだよつめてえなあ、とぼやきつつオヤジはフラフラと違う群に向かっていった。

「魚姫さん、小笠原さんいないの？」

聞いてから、そういえばずっと見かけなかったなと気付く。宴会

が始まるまでは僕の隣で話を聞いたり声を荒げたりとしていたけれど、みんなが酒盛りを初めてから席を立ててそのまま気がする。

「いつものことなんですけれどね。こういう宴会にはちっとも参加しません。騒がしいのがお嫌いだし、また一人寂しい夜を過ごしているのだと思うんですけれど」

「ふうん……じゃ、今のうち僕帰ろうかな」

「あら、薄情ですわね」

「うん、探してくるね」

くるんと手のひら返しをしたのは、その魚姫さんの言葉をその通りに取ったからではない。逆に、素敵と言いたげなその笑みが僕のイラン評価を上げそうだったので、回避すべくだ。

よろしくお願いしますね、と若干残念そうに頼まれた。

とは、言え。

初めて入ったこの極道屋敷で僕がどこをどう探せるわけでもなく。田舎の古い家特有の板間の廊下をあてどなく歩き続けて、かれこれ。

30分。

経ちました、と。

……おい、広すぎんだよこの家……！

明かりがない中、慎重に歩いているせいもあると思うけど、だいたい似たようなふすまの部屋が並ぶのも問題だと思う。上方の木枠の飾り穴から明かりが漏れているけど、人の気配はまるでない。

そついや、さっきのオヤジが若い衆は景気づけに外で女をどうのこつと言ってたな。もしや小笠原さんも外に出てるんじゃないよね？

本当は一つ一つふすまを開けて回りたいけど、ロシアンルーレットばりに強面ヤクザさんがいるところを当てたらと思うと、博打の打てない小心者つまりこの僕には無理な芸当です。未恐ろしい。

二つくらい前に通り過ぎたふすまからは酒ヤケと思われるガラガラ声の高笑いが聞こえてきたし、その三つ前の部屋では罵声と悲鳴がこだましていた。

聞かなかったフリして全力で駆け抜けた僕。

こんなときでなければ歩きたいと思わないよ！？ 遊園地のアトラクションでも絶対いや！

ゴールどこだよ。

魚姫さんに、めばしい場所でも聞いておけば良かった……。

うなだれつつ歩いていると、少し先のふすまから人の声が聞こえてきた。

今度は何だよ。頬をひくつかせ、腰を落としスタートダッシュを決め込める体勢を取っておく。

「あつ、そこは駄目だ……！」

今度は何の断末魔だとおっかなびつくりの僕の耳に飛び込んできたのは……苦しそうでそのくせ甘ったるい男の……。

なんだ？



と、耳をそばだてたのがいけなかった。  
聞こえてくる声を理解した瞬間、脳みそが沸騰しそうなほど顔が熱くなった。

これは、あの、いわゆる嬌声ってやつ。

きゃあああ。

な、な、なにやってんの！

「リュウ、良いだろ……？」

それから嬌声に混じって、低く艶っぽい声がやけに明瞭に聞こえてくる。良いだろって、リュウって。

うそ、ええ、おい、もしかなくても中に居るの小笠原さん！？

ますます何これえええ！

耳を塞いで後退ったら、後ろのふすまに背中がぶつかった。それに体が敏感に反応してしまい、さらにぎゅっと身を固くする。

そのとき、目の前のふすまがするりと開いた。

「リュウ、また来る」

目を見開く僕の前に姿を現したのは、浅黒くて、筋肉質で、汗ばんでいる広いむないた……って、どこ見てる僕！

って、どうして上半身裸！

ぎしりと床がきしんでそれが胸板ごと近づいてくるのが分かった。ああ、ああ、見られてる見られてる。すいませんすいません。聞き耳立てててすいませんったら。だからそんな近づいて見ないでください。穴ほげる。

「アンタ誰だ？」

「あの、僕」

「見ねえ顔だな。もしかして、アンタ、リュウの……」

「ち、ち、ちが」

「……ふーん？」

いろいろと恥ずかしくてマトモに顔を見られず、かといって俯くこともできず、ますます近づいた胸板を凝視したまま狼狽える。すると、小笠原さんじゃない、僕の顔を穴が開くほど見つめてくれちゃっている相手の男の声が、ワントーン下がった。

「顔でもないし、その体でもなさそうだな」

何か、威嚇するような声色に、反射的に顔を上げる。

「オレは納得していないし、認める気もねえ」

正面を向いた僕の目の前で、波打つ黒髪が横切った。隙間から覗

く鋭い双眸が僕の目を射止めて強い光を残していった。

追いかけるように視線を揺るがした僕には、今はもう後ろ姿しか見えない。

どういう、意味だ？

「真央」

血の気が引き、身動きのとれなくなった僕を誰かが呼んだ。部屋の明かりに照らされながら見た先では、小笠原さんが気怠げに突っ立っていた。

とんでもないことされた

これほどまでに心安らかに、小笠原さんを見つめたことがあっただろうか。

否、無い。

「お、がさわら、さん……」

まるで明かりにたかる羽虫の如く、部屋の照明だけじゃない、それはそれは神々しく光っている小笠原さんを求めてふらりと体が動く。足より先に手、手より先に指先。

人差し指の先が、心なしか暖かい眼差しの小笠原さんに届く。

前に、手首を握られ、腰ごとぐいと引き寄せられる。

肺の空気が強く押し出され、ため息が唇から漏れた。必然的に上を向く形になった僕のおでこは、小笠原さんの頬と触れあっていた。

「真央」

「小笠原、さん……」

何ですか、コレは？

さらに強い力で腰をぎゅっと抱かれて、現実引き戻された。うつろに天井を見つめていた僕のまなこは、信じられなさで充血する

ほどもなぎつてきた。

なんで、急に抱き合ってたんの？  
すごい自然な展開でビックリしましたよ僕。

あの底冷えするような睨みですっかり肝っ玉が縮み上がってしまい、見慣れた小笠原さんがなんだかとても安心した。根っからの小心者ゆえ、未知の恐怖に遭遇して、少しでも身近な人間に暖かみを求めたかったらしい。

それはそれとして、すんなり受け入れちゃう小笠原さんもどうなの？ すいません、あの、そろそろ首の後ろも、引っ張られたままの手首も、浮きかけの足も痛いんですがね。

「……は」

と、思っていたら、あっけなく手放された。バカにするような嘲笑付きで。

それはもう、柔らかく手放すでも突き放すでもなく、本当に興味を失ったみたいにボタンと落とされた。

全体重を預けていた僕は、そのまま重力に従って前屈みに倒れ伏すことになった。

「な、なにふんでふか」

手で支える暇もなく、そのまま顔着地を果たしたため、口から漏れる恨み言は畳に吸収されてくぐもって情けない。

「無理だ、やっぱりおまえには欲情しねえ」

……それで、言うに事欠いて、それ。

追い打ちですか、羽虫というよりウジ虫の如くあなた様の前にひれふすこの僕に向かって、そのセリフ。

別にさあ、欲情されたらそれはそれで嫌すぎるんだけど！

思い出すのは、さっきの上半身裸の男だ。その人にも、なんだかすっごい不本意なことを言われたような気がするし。

バカにされたというか？

顔はともかく体は関係ないだろ。僕だって男である、プライドを持って体には自信を持ちたいお年頃なのだ。

「さっきの、誰なんですか」

顔は横にずらしたものの、未だ畳にウジ虫でいる僕の口からすねたような声が出た。

「おまえの知らねえヤツだ」

「知らないから教えてくださいって言うてるんですけど。その、なんか、いかがわしそうな、人だし……」

「ああ？ まあ、あいつは真正正銘の変態だからな。……つか、おまえもいつまでそうやってんだ。目障り」

長いおみ足で蹴られて、ごろんと仰向けになる。  
さっきまでの強い抱擁がウソのようなぞんざいな扱いだなコレ。  
本当にさっきのアレは僕に欲情するかどうか確かめてただけだったらしい。そんな方法で普通確かめるかと言いたい。むしろ確かめる意味を聞きたい。

「広い部屋ですね……」

仰向けになったことをいいことに、ごろごろしながら部屋を見回してみる。十畳以上はありそうな部屋だが、桐箆笥、文机、座椅子、テレビくらいしかない。

殺風景だな……ものがないのは良いけれど、まるで生活感もなければ、癒しもない。せめてもっとこう、花とか飾ればいいのに。

「ここが、小笠原さんの部屋ですか？ いっぱい同じような部屋があつたから、もう二度と来れそうにないです」

「っーかおまえは何しにやってきたんだ。宴会は？ 終わったのかよ」

「まだやってましたけどね。僕、もう帰るところです。明日のことも関係ないし、いつまでもここにいたってしょうがないし」

「あー、帰れ帰れ」

「ごろごろする僕に背中を向けて座る小笠原さん。その向かいに結構大きめの卓上薄型テレビがある。こう、古風な家にすんでいる割に、近代的な物が多い。」

それを着流し姿で、開け放った庭の風情を感じながら見るなんて、結構雅だよなあ。

……美しいよなあ。

小笠原さんの均整の取れた体に、のぞくうなじ、開けた首もとの鎖骨が、男らしさの中に妖艶な色香をもたせている。庭では、池の水面にゆらゆらゆれる幻想的な丸い月。

絵にならない方がおかしい。

魂を抜かれたように、ぼーっとこの一つの情景を見つめていると、テレビの画面が急に明るくなった。

そこで、流れ出した映像に、のぼせていた気持ちが一気に醒めた。

「先輩っ！ いや、嫌です！」

「嫌だは聞かない。おまえに拒否権はねえんだよ。いいから大人しくしろよ、たつぷりかわいがってやるからよ」

「いや、いやーっ」

……嫌なのはこっちなんですけどおお！

ちよつと、テレビの中のお二人！ 今は空気を読んでいた  
だきたい！ だから急に絡み合うな！ お願いだから浸っていた僕の時間を返してくれ！

てゅーか、それを何の疑いもなく流し始めた小笠原さん！？



「きゃーっ！ 何観てんですかつ！」

リモコンを操作しているらしい小笠原さんの手に飛びつく。あっさり避けられた僕は、またしても小笠原さんの目の前で前のめりに転ぶハメになる。さっきよりテレビが近くなつて、二人の盛り上がりが直接耳に飛び込んできた。

憤死どころか恥死する。

「何って、アダルトビデオだろ？ 最近はこのうのも流行っているらしいからな」

「だから何で観てるんですってば！ このいうのは一人で見てくださいよ！ ていうか何で今！？ ていうかなんで男同士ー！？」

「さっきのは駄目だったからな……なあ、次はどのシチュエーション試すか？」

「た、た、た、試すって！ もしかしてさっきの聞こえてきた声も、僕にしたことも……！」

畳でじたばた暴れる僕の上に、のっそりと小笠原さんが近づいてくる。テレビの中と同じ、四つん這いの姿勢で囲われて、僕に逃げ場はなかった。真後ろから聞こえてくる恥ずかしい声がさらに僕を追い込んでいく。

「なるほどな、抵抗されると征服してやりたくなる。おまえ、こういうの得意そうだな」

「得意も何もねえよコラ！ 来んなバカッ……すいませんどいてくださいほんとおねがいします」

「生意気なおまえには」

「うひっ」

「ここをこうして……」

「やめてったら、先輩っ」

「へえ？ やめて欲しいの？」

「ぎゃああひいい……って紛らわしいーっつの！」

前から後ろから誰が何だか分からないまま繰り広げられる怪しい  
プレイに終止符を打ったのは、そんな僕の叫びと共に繰り出された  
火事場のくそ力だった。

なおも強い力で迫ってくる小笠原さんを、僕は無我夢中で後ろむ  
きに投げ飛ばしていた。

……人って空を飛ぶんだ、と関心している場合じゃなく。

次の瞬間、あたりに強い水しぶきの音がこだました。

「……やば」

いつの間にか外されていたシャツのボタンを留める余裕もなく、  
恐る恐る見つめた先に、月が浮いた池に浸かる水も滴るいい男。そ  
う、髪を掻き上げる仕草なんて、色っぽくて、なんて……。

なんて……死期を感じる。

「小笠原さん、さて、続きを致しましょうかね」

「……そうだな、今からおまえを天国に送ってやろう」

ぎゃああ、ガチで殺される！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1937z/>

---

極道の花婿くん

2011年12月20日19時51分発行